

「こんにちは、今日はなんか仕入れた？」  
からんからん、と古びたドアベルが鳴り、私が店内に入ってきたことを店主に知らせる。  
「おお、蒼ちゃん。良いのが入ってるよ」  
この店は、何だか不思議な店だ。  
何年もこの街に住んでいる私が言うのだから間違いはない。



始まりは、私が小学生の頃だった。  
男子にいじめられ、どうしようもなく惨めな気持ちになっていたときのことだ。

この店は、唐突にこの街に現れた。  
街の一角の、あまり目立たない場所――客のいない古本屋と店主がいるかわからない花屋の間――に、いきなり現れた。

「なに、ここ」  
もちろんだが私は戸惑った。だって、見たこともない、生きているみたいに見える人形やクモの巣のような飾り、陶器でできた女の人の像などが、ぶら下がったり置いてあったり、ごちゃごちゃにしてあった。

興味。  
私はその日のことを一気に忘れるくらい驚き、同時に興奮していた。こんなものが街にあるはずがなかったし、あったとしたらずっと前から知っていないとおかしい。それくらい、この店は古びていた。

ドアの前に立ち、私は店名が書かれたプレートを見る。

『あんでみく 夜ノ星空』

見たこともない文字が挟まったその店名に、私は首をかしげた。

怪しい事この上ない……けれど、私の胸の中には恐怖など一切なく、好奇心でいっぱいだった。私の頭よりちょっと低いくらいのドアノブに手をかけて、そっと扉を開く。

頭のはるか上でドアベルが鳴るのが聞こえた。その音がゆっくりと、静かになっていく。店の中が静かに――静かに、なる。

「いらっしやい」

しわがれた声が、私の訪問を出迎える。

「ひっ」

「おやおや、お嬢ちゃん。この店に【入ってこれた】のかい。それは嬉しいね」  
「だ、だれ？」

「この店、『あんでみく《アンティーク》 夜の星空』の店主をやっている、暗闇宵影《くらやみよいかげ》といますよ。よろしくねえ」

「ご、ごめんなさいまちがえましたっ！」

私はその雰囲気を押され、慌てて店を飛び出した。

次の日。

あの店に行こうと思った。私は『あんでみく 夜の星空』がそこにあるなんて、と、まだ半信半疑だったからだ。

そうして、最初から疑ってかかると……店は、やっぱり見つからなかった。

「なんだ、やっぱりないじゃない。夢でも見てたんだわ」

それから少しの間、奇妙なこの店のことを忘れて毎日を過ごした。

だが、ある日のことだった。

私はその日、失恋をしてしまった。

大好きだった男子が、他の女の子に告白しているのを見てしまったのである。気分は最悪だった。

どんよりとした気分で、商店街を歩く。

何か、気分転換がしたい。それこそ、あの店でも覗いたら楽しいだろう。だけど、もう無くなってしまったし――

「ちよいとお嬢さん。あなたの心に良い葉がありますよ」

「え……」

私はそのしわがれた声に聞き覚えがあった。『あんでみく 夜の星空』の店主の声だ。

「良い葉？」

「そうだよ。わたしを信じて、わたしに願ってくれる良い子には、素敵なものを持ってあげるよ」  
そうして店主はひひひ、と笑った。

それから私、遠野蒼空《とおのおおぞら》と暗闇宵影さんの付き合いは始まった。



「いいものって、何？ 宵影さん、早く早く」

「そう急かさないでくれよ。……ほら、こいつさ」

言って、宵影さんは透明な何かをそこに置いた。

「んー、んん？ 何、これ。からっぽじゃない」

それはただの透明な何かで、同じ形の四角形が六枚均等に、立体になるように。つまり立方体になるように組み立てられていた。だが、その継ぎ目は薄く、よくよく目を凝らさないと、机の上にも乗っていないのではないかと錯覚してしまいそうだ。

「こいつはね、『閉じ込め箱』さ」

「閉じ込め……何かを閉じ込められるの？」

「そうだよ。お値段は八百円」

「やっす。相変わらずだねー」

「ひひひ、それがうちのウリさ」

にんまりと、猫のように宵影さんは笑った。

私は「触ってもいい？」と一言断りを入れて箱に触れた。なんにも入っていないだけあって、羽のように軽い。

「この箱はね、蒼ちゃん。思ったものを『なんでも』閉じ込めることができるのさ」

「思ったものって、それが生き物でも？」

「当然。でも、この箱を開けたらもとの場所に戻ってしまう。そしてこの箱に閉じ込められていると外とやりとりできなくなる」

「それ、なんか意味あるの？」

「価値がわかる人にはわかるってものさ」

私は、色々考える。それなら何か面白いことができるんじゃないだろうか。素敵なことができるんじゃないだろうか。

考え始めるとわくわくしてとまらなくなった。

そんな私に、宵影さんはすっと右手を差し出す。

「ほら、八百円よこしな」

そうしてちよいちよい、と催促した。

「くう……よくわかってるじゃない」

私は財布を取り出して、いちにいさん、と百円玉を数え、それに五百円玉を添えて宵影さん到手渡した。

「はい、毎度」

そうして私は、何でも閉じ込められる箱を手に入れた。

何を閉じ込めたらいいだろう。お風呂に入りながらぼう々と考える。

好きな人？ いや、死んじゃうし。

宝石？ いやいや、事件になったらまずい。

いっそ、星とか……いやいやいや、核融合とかしてるじゃん、あれ。

「はあ。難しいなあ」

宵影さんも難儀なものを買ってくれたものだ、とぬる湯につかりながら考える。

星……宇宙……空気が……？

あ、そうだ。

「そうだ、それにしよう！」

私はそう決めて、湯船から勢いよく立ち上がった。勢いよくお湯が跳ねて、盛大な音を立てた。

それから毎日、私は箱の中を見て過ごしている。

「今日は良く晴れてるなあ」

からっぽだった箱の中身には、さんさんと晴れた空が切り取られてそこにある。

私は箱に、『空のひとかけらを閉じ込めたい』と願った。

見事、その願いは成功し、日々変わっていく空模様が箱の中で再現されている。虹が見えた日もあれば、雷が落ちた日もあった。

私はそんな箱が気に入って、机の上に置くことにした。窓が小さいこの部屋だけど、この箱のおかげで朝が来たのがわかりやすくなった。

あんでみるく 夜の星空

今日も、あの店は不思議なものを置いている。